
アイデアの波に乗って

トマ兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イデアの波に乗って

【Nコード】

N7295Y

【作者名】

トマ兎

【あらすじ】

ネギ・スプリングフィールドの双子の弟として生まれた主人公。自分についての記憶がない。原作知識もない。魔法の才能もない。特別な能力はあるけどチートじゃない。

ないない尽くしの主人公。あるのは情熱だけ。
そんなネギま！転生記

※この小説は携帯で書いてるので、パソコンで読むと多分見づらいです。

一話

――落ちる。

――墜ちる。

――墮ちる。

――おちる？

上下左右前後がない空間で、ただ漠然とそんなことを思ってた。
浮遊感はない。下から吹き付ける風もない。下もない。

つてか体がない。

なのに自分が今おちてることはわかる。

摩訶不思議な体験。でも何故か今までにないくらい落ち着いている。
――いや、違う。落ち着いてるんじゃない。余計な事を考えられないだけ。

――オチル。

――おちル。

――オちル。

堂堂巡りの思考。変わらない空間。しかし終着点が見えた。どのくらい落ちていたかわからない。“やっ”なのか“もう”なのか。

――おちる。

——おちる。

——着いた。

「オンギャー」

生まれ落ちるのと同時に、俺の意識は落ちた。

一話

最初の覚醒は突然だった。

前触れが一切なく起こったそれに少し戸惑う。頭の中が疑問で満ちないように空っぽにする。

そして最初から整理するために、先ずは声を出して自己の認識。

「あゝううゝあ」

……よし！オツケー！

予定してた言葉より少し違う音が口から出たが問題ない。これから
の事を思うと瑣末事だ。声を出すという目的は達成できているので、
深く考えたらダメだ。深く考えたらダメだぞ、俺。

そして次に自己の確立。俺についての『誰』『何』をしつかり理解し、これからの……せい……り……って寝るな俺っ……！

確かに少し難しかったかもしれない。でも自己を確立する事は最優先で片付けて起きたい事だ。そうすればこれから行う整理の時に、沸いて来る疑問に対して有利に進める……こ……とが……あ……
………って何故だ！何故寝てしまうんだ俺！！

難しいのがダメなのか!! 難しい事がダメなんだろ!!!!

わかった。それなら仕方ない。自己の確立なんてどうでもいい。今やるべき事はそんなことじゃない。そうだ大事なことがあった。先ず最初にこれをやるべきだった。

これはいくら考えても答えはでないだろう。一番可能性があるのは輪廻転生だが、前世の記憶を持ってというのはなかったはず。輪廻転生は仏教の考えで、仏教の起源はバラモン教。別にどっちも熱心に信仰してた訳じゃないのに。……ん？あれ？俺って宗教どこだっけ？……

……アメリカの首都は？

ワシントンD・C.

572+318＝？

890

俺の誕生日は？

……

賢い人はホモⅡサピエンス。なら信じる人は？

ホモⅡレリギオス

万物の根源は何かという問題にタレスは水、アナクシマンドロスは無限なもの、ピタゴラスは数と答えた。では原子と答えたのは？

デモクリトス

ガンディーの非暴力抵抗方式を黒人闘争に取り入れ、人種平等・経済的平等、平和、民主主義などの実現を目指し、奴隷解放100周年1963年8月、ワシントン大行進をおこない、「私には夢がある。いつか奴隷の子孫と奴隷所有者の子孫が兄弟として同じテーブルにつく夢が」と演説したのは誰？

キング牧師

俺の名前は？

.....

[illegible]

マジかよー！ 典型的な記憶喪失じゃん！ いや典型的なのか？ 自分の事忘れてこんな偏った事覚えてるっておかしくないか？ いやそんなことはどうだっていい。問題なのは問題がまた増えたって事だ。

ある日突然赤ちゃんになって。自分の事は一切忘れてる。

あれ？まともたら案外少ない。いやでも一つの大きさがとんでもない。ってかどっちも考えても仕方ない。

………寝るか！考えるのが無駄なら寝る方がいい。下手な考え休むに似たり。先人はいい言葉を残したよ。起きたら夢でありますように。

三話

夢じゃなかった。

そして

「あうあうあゝ」（知らない天井だ）

ここは何処？私は誰？

最初の覚醒時は周りを見る余裕がなかったが、改めて見ると覚えのない場所に寝転がっているようだ。

もっとよく見ようと首を動かそうとするが、まだすわってないよう動かない。

でもこれで自分が今何歳なのかわかった。生後三ヶ月未満といったところか。まだ生まれただてホヤホヤだ。

現状の把握をもっとしっかりおこないたいが、最初の失敗を見習って、あまり深く考えないようにする。

それに新たな問題が二つ浮上したので、一つの事に集中してる場合じゃない。

問題一つ目、腹が減った。

最初の覚醒からどのくらい時間が経ったのかわからないが、とにかく腹が減った。でもこの身は首もすわってない赤ん坊。何もできない。

泣いたら誰か来るのかな？でもこんな成熟した精神を持っているのに泣きわめくのはちよつと気が引ける。

そう思ってた時期がありました。

最近年なのかな？随分涙脆くなったみたいだ。何も起こってないのに、すごく悲しくなってきた。なんだかお腹空いてる事が、ひどく情けないことのように思えて……

「オンギャー」

泣いちゃった。

恥ずかしくて泣き止もうと努力するも、一度開いた涙腺はなかなか閉まらない。それどころか逆に激しくなる。

「オ
ン
ギ
ヤ
ア
ー
ー
ー
ー
ー」

もう恥ずかしいとか言ってられない。お腹空いた。誰かきて。

「はいはい。どうしたんじゃ？ スズナ？」

救世主登場！

救世主は金髪でロングストレートの女の子だ。慣れはじめたといった手つきで俺を抱き上げる。

スズナというのは俺の名前みたいだ。

「ホレ、お母さんだぞ。」

あっこれは御丁寧にどうも。俺はスズナって言います。カッコイイ眉毛してますね。

初対面でこんな事頼むのは失礼になるんですが、お腹が空いてるのでご飯を用意していただければ幸いです。

「どうした？オムツか？」

いえ、腹が減ってるんです。もうお腹と背中がくつつきそうです。

「違うか……。なら寂しいのか？」

違います。ご飯を用意してください。あと人のケツを勝手に触るのはやめろ。

「ホレホレ、お母さんはここだぞ。」

あやされても腹は膨れねえよ。さっさと飯持ってこい。

「イナイイナイバア〜」

いいかげんにしろおお！！！！こっちは死活問題なんだよ！！てめ

えのつまらなえギャグ見てる暇ねんだよ!! 腹が減ったって言うてんだろ!!! わかったらさっさと飯持ってくるか、その枝分かれした不思議眉毛剃り落としてこい!!!

「これもダメか……。あつ腹が減ったのか？」

やっとわかったか。わかったんならさっさとミルク持ってきてこい。ロツクで。

人肌に冷ますの忘れんなよ。

「ちょっと待っておれよ。」

待つよ。いくらでも待つ。だから早く持ってきてくれ。

ん？何ゴソゴソしてんだよ。俺の事は一旦ベッドに置いて、用意しにいけよ。

「ホレ、いっぱい飲むんだぞ」

……俺が悪かった。全てを謝ろう。

母乳かよ！クソツタレエエエ！！！！

ちよっと待て！それはダメだ！ホントにダメだ！！何がダメかって全てがダメだ。

確かに体は首もすわってない、生後三ヶ月未満の赤ちゃんだ。でも精神は違う！エピソード記憶がぶっ飛んでるので自分が何歳かわからないが、多分成人してるぞ。現に事態に陥るまで母乳の事なんか頭からすっかり抜け落ちていた。そして年頃の女の人から授乳する事に激しく抵抗している。ってか離乳は一歳三ヶ月ころから開始する。ここまで複雑な思考ができて、前世は一歳ですなんてことはないはずだ。

「フフッあまり強く吸い付くでないぞ。」

おいしい！！もう目の前にあるうう！！！！ヤッベ、すっぱーピンク色。そうじゃねーよお！！お願い！！一生のお願い！！！！生後三ヶ月未満だけど、一生のお願い使っちゃう！それだけはっ！！それだけはやめてっ！！！！なんでもするからっ！！初めて喋る言葉はマンマにするし。夜泣きもしない！！だからそれだけはっ！！

おいっ！バカっ！やめっ！

チューチューゴクゴク

チューチューゴクゴク

チューチューゴクン

ゲプッ

もう何も怖くない

さて腹も膨れたし二つ目の問題について考えようか。

それは違和感があるのだ。

いや赤ちゃんになってる事がすでにおかしいんだが、エピソード記憶がぶっ飛んでるおかげで自分が赤ちゃんになってる事についてはそこまで大きな違和感を感じない。あと俺の言葉遣いが定まらないのは、未発達の頭に成熟した精神が合ってないんだろう。子供はすぐ泣くし、すぐ笑うし、すぐ怒る。子供の激しい感情の起伏が中途半端に精神に反映されてるみたいだ。

じゃあ何が違和感になってるかというと、“何か”あるのだ。何かとは随分漠然とした言い方なんだか、何かとしか言いようがない。

自分の体の中に二つ。そして自分の周りにも感じる事ができる。

体の中にある二つの内一つは、周りにあるものと一緒。いや周りにあるものを吸収してるのか？

もう一つは体の中から湧き出てるようだ。

全くわからん。

わかる事といったら、この二つはさっき俺を凌辱したお母さんから感じた事。

特別なものではないのか？

それとも俺とお母さんが特別なのか？

情報が少なすぎるから判断に困るな。

もっと考えたいが時間だ。子供の仕事はよく食って、よく寝て、よ

く出す。さつき満腹になったので眠たくなってきた。

今度こそ起きたら夢オチでありますように。

三話（後書き）

アリカ登場

口調はこれでいいの？アリカって金髪だっけ？ってかいつ頃ネギを村に預けたの？

wiki頼りなので合ってるかわかんない。

来月に漫画買う予定です。

そして主人公の名前判明。

大体ほかの二次創作ではアリカから名前を取っているんですが、この小説ではスプリングフィールドから取りました。

スズナっていうのはカブの別称です。そしてカブは春の七草の一つです

理由はほかの作品との差別化っていうのが大きな理由なんですけど、災厄の魔女って呼ばれてる自分の名前から取って子供の名前つけるかなあって思ってた。

まあ名前なんてどうでもいいんですけどね。

最後に主人公が感じた違和感の正体は気と魔力です。

ほとんどの人がわかったと思いますけど。

四話

首がすわって数週間。もうほとんどの赤ちゃんプレイは網羅した。初めてののお漏らしとオムツ交換はかなり精神にクルものがあった。しかし今では慣れた。人は適応する動物なのだ。

そして俺は今、大きな事を成そうと挑戦中だ。

これは俺自身にとっても、人類、いや世界にとって大きな一歩となるだろう。

俺がこれを成す事によって人類は新しい進化の可能性を見つける。俺は今試されているのだ。まさか生後三ヶ月とちょっとでこんな大役を任されるとは思わなかった。しかし試されているならそれに答えるのが男。俺の底力を思い知れえ！

ゴロンッ

やった！ついにできた！！これで人類は別の進化の道を辿る事になる。その結果、人類はエネルギー問題を改善、地球温暖化も解消。世界は救われ、みんな笑顔になる。鳴り止まないファンファーレと響き渡る拍手に浸りながら、俺は溢れ出る達成感に身を任せた。

ん？何ができたって？
寝返りだバカヤロー。

さて、寝返りもできたし次のステップだ。

まず体の中から湧き出てる何かに意識を集中させる。体全体を把握する事は出来ないので、より集中しやすいように一カ所に限定する。集中する場所はお腹の下あたり。そしてヘソ、胸、肩、に流して、腕まで持っていく。掌でしっかり毛布を掴み、何かに満たされた腕を使って体を起こした。

この数週間、色々と違和感について考察して、なんとなくこれの正体とできる事がわかってきた。

簡単な肉体強化、それと体調を整える事もできる。

生まれたての乳児はちよつとした事ですぐ体調を崩す。実際俺も少し体がダルいなど感じる時があった。その時にはすでに、この何かはある程度操作可能だとわかっていた。悪い感じはしなかったのものは試しだと思って体中を循環させたら、段々体調がよくなってきた。それ以来、体調を崩した時は何かを循環させるようにしている。

肉体の強化はさっき実演した通りだ。

この二つの事から、違和感の正体は“気”ではないかと思う。

気は東洋医学では重要な診察方法の一つだ。武術でも独自の概念と理論で気を利用する流派がある。

体調を整える事も、肉体を強化する事も可能だ。

しかし、この違和感を気と仮定すると疑問も沸いて来る。

まず、こんなとんでもないものなのか？東洋医学で使われているといっても、はっきり実感するほど効果がでるとは思えない。

肉体の強化もそうだ。寝返りも、手の平で支えて頭を上げる事も、どっちも普通なら生後五ヶ月ころにできる。俺はまだ四ヶ月も経っていない。

そして、もし気なら何故俺は違和感として認識したのか。気は色々な解釈があるが万物に流転するもの、万物を構成する要素と、どんなものにも存在する。なのに俺はそれに違和感を感じた。

……いくら考えても答えは出そうにない。

それに違和感はもう一つある。こっちの方は全然わかっていない。

今は目の前の事に集中しよう。目の前には赤ちゃんがいる。年は俺と同じくらい。多分双子だろう。名前はネギとお母さんが言っていた。

その頬っぺたは触れなくてもわかるぐらいやわらかそうで、ちっちゃい手には愛嬌がこれでもかかっていうほど詰まっている。

(ヤッベー、めっちゃかわいい)

赤ちゃんを愛でる赤ちゃん。なんとも奇妙な図がそこにはあった。

ずっと見ていたかったが、そろそろ限界だ。腕がプルプルしてきた。

上げていた体を下ろし、腕に溜めた気を解放した。そして次は体中に気を流す。正確に流す事はできないが、これで充分。気合い一発っ！強化した全身の筋肉を使って二度目の寝返りに成功。

考える事、片付けないといけない問題はいっぱいある。でも今はこの赤ちゃんプレイ、もとい赤ちゃんライフを楽しもうと思う。まだまだ人生は始まったばかりなのだから。

もう夢オチは期待しない方がいいだろう。

四話（後書き）

ネギ登場です。

まだこの時はかわいい赤ちゃん。もちろんセリフはない。

ってか四話書いてまだ赤ちゃんって……。

展開が遅すぎる……

更新が早い方がいいと思って、ちよつと書いて投稿してるんですが、もつと書き溜めてから投稿した方がいいのかな？初めて小説書くんでよくわかんないです。

主人公とネギの関係なんですが、どうしましょつか？

ほかの作品は険悪な関係が多いんですけど、俺はそんなにネギ君嫌いじゃないし、主人公も原作知識がないので無理に嫌う必要はない……。

男の娘にしてヒロイン入りとかありますか？

五話

生後五ヶ月が過ぎた。今日もしっかり赤ちゃんプレイを満喫している。

この一ヶ月とちよつとで色々な事が起こった。

ネギが寝返りに成功した。

ネギが喃語（バーバー、ブーなど）を喋った。

ネギがほえみ返してくれた。

ネギが笑いかけてくれた。

最近ネギが可愛くて仕方ない。子供の成長って早いね。昨日までは全然出来なかった事が今日には出来てる。そして日に日に可愛くなっていく。もうね毎日萌えっぱなしです。

明日には何が出来るんだろう、一人で大丈夫かな？手伝いはいらない？

ネギの一挙一動にいちいち不安がり、そして期待する。

ハイ、もう立派なお父さんです。同い年だけどね。

ネギの成長は早いけど、やっぱり俺の方が早い。

もう七ヶ月相当の事は出来るようになった。最近はひとりで座れるように努力中だ。初めてお母さんの事をマンマと言った時は両親共にお祭り騒ぎだった。

そして努力の結果ひとりで座れるようになった頃、大事件が起こった。両親が喧嘩したのだ。

いや、喧嘩の理由も、喧嘩の規模も大した事はない。お母さんは物を投げたりしてたが、お父さんには一つも当たっていなかった。喧嘩するほど仲がいい。この慣用句が頭の中に浮かぶような喧嘩だった。最後はネギが泣き出して二人であやして仲直り。実に平和的な喧嘩だった。

なのに、この喧嘩を大事件と言ったのは、俺の今後を左右する要素が含まれていたからだ。

魔法。

俺は初めて超常の出来事を目の当たりした。

さっき、お母さんは物を投げて、お父さんは一つも当たらなかった、
といったがこれは少し語弊がある。

お母さんはお父さんに当てるつもりで物を投げた。そしてお父さんは避けなかった。しかしお父さんには当たらなかった。お父さんの前にある、何もない空間に弾かれて。

俺はこの時悟った。

二つの違和感の正体。

自分がどういう存在なのかを。

体から湧き出てる違和感。これは前に話した通り“気”だ。

そしてもう一つ、周りから吸収している違和感。これは“魔力”だ。

お父さんが物を弾く瞬間、その空間には確かに何もなかった。しかし、俺には感じる事ができた。お父さんの体から俺を悩ませてきた違和感が出てきて、綺麗に一つに纏まり物を弾いた。

はっきり言ってこの一連の現象を魔法と断ずる証拠はない。だからこれに使用していた違和感も魔力だと決まった訳ではない。でも俺はこの違和感の正体は魔力だと確信していた。何故かはわからない。

俺の根源がそうしているのか、それとも神の見えざる手がそうしているのか。

そういえば気の事を考察してる時も、同じような確信があった。色々考えて別の可能性を探していたが、心の奥では気以外にはありえないと思ってた。

うーん、自分がという存在か悟ったと言ったが、また新しい謎が増えた。俺は一体何者なんだ？何故自分の事を一切合切忘れてる？

今回の両親の喧嘩でわかった事は、俺はこの世界の住人ではなかったということ。

……ショックはある。でももう立ち直った。

どうしてそう思ったかという、やっぱり気と魔力を違和感として認識したからだ。

両親の様子から、この二つはあって当たり前のものなのだろう。でも俺はそんなあって当たり前のものに違和感を感じた。

それにこの違和感はすごく大きいのだ。生まれて五ヶ月経つのに一向に慣れない。こんな違和感を抱えて、幼いネギが正気でいられるとは思えない。

多分この世界の気は、俺のいた世界のものよりずっと強力なのだろう。

魔力は俺のいた世界ではオカルトの産物。

だから俺はこの世界に生まれて、気と魔力に違和感を感じた。

わからなかった事がわかってきている。でも俺は前世の自分の事はわからないままでもいいと思ってる。

だって俺はもうスズナ・スプリングフィールドなのだ。

騒がしい両親がいて、最高に可愛い兄弟がいる。それが今の俺の全てだ。

俺は隣にいるネギに笑いかける。ネギは俺と目が合うと声を出して笑い出す。

明日はいい日になりますように。

五話（後書き）

なんか色々進展した話。

主人公が異世界人だったり、主人公の能力の片鱗がでてきたり、主人公がネギに萌え萌えしてたり。

主人公とネギの関係はホントにどうしよ。

いくつか考えてるんですがどれがいいですかね？

？主人公はネギの事を気にかけてるけど、ネギは主人公の事嫌い。

？二人共嫌い合ってる。

？普通に仲の良い兄弟。

？ネギを男の娘にしてヒロイン化。

？が一番話出来上がってます。

六話

生後七ヶ月。俺達は両親の元を離れた。

事情はわからないが、どうやらお父さんの故郷に預けられる事になったらしい。

別れる際、お母さんがずっと謝っていたのが印象的だった。

環境が変わって、もっとこの世界の事を調べようと思い、最近できるようになったハイハイで本のところに向かう。しかし、

「あゝスズナちゃんどこ行くの」

これだ。俺の従姉で、現在の俺の敵。ネカネ・スプリングフィールド。

「向こうは危ないからお姉ちゃんと一緒に遊びましょうね」

事あるごとに俺の行動を邪魔する。

確かに、まだ一歳満たない子供を一人にしないようにするのはわかるし、弟ができて可愛がりたいのもわかる。

でも、俺もハイハイができるようになって行動範囲が増えたのだ。

溜まりに溜まった疑問を早く解決したい。

「イナイイナ〜イバァー」

ハァ……俺の願いは届きそうにない。

心の中でため息を吐き、目の前にある従姉の満面の笑顔に向かって
愛想笑いを送った。

預けられてから約一週間。俺は疑問を解決する事を後回しにし、ほ
かの事に集中することにした。

気と魔力。

やっぱり男の子ならこの二つは使ってみたいと思う。

俺が前にいた世界では、この二つは漫画やアニメの中にしか存在し
ないものだった。……多分。

自分についての記憶がないせいで、自分がどんな漫画やアニメを見
ていたかわからない。ってかどんな漫画やアニメがあったかわから
ない。

キング牧師はすんなり出てきたのに、漫画とアニメは全く出てこな
いとは……。

前の俺は結構いい歳だったのか？……いや、もう考えるのはよそう。今さら前の自分の事がわかってどうなる。俺はスズナ・スプリングフィールド。プリティーキュートな赤ちゃんだ。いい加減、前の自分とは決別しないと。

さて、気を取り直して集中だ。

気と魔力。この二つの可能性は無限大だ。今からある程度操作に慣れておけば利用方法がわかった時色々便利になる。

まずは気を全身、どこでも流せるようになる。今は俺の操作が甘いのか、それともまだ俺が全身を把握仕切れてないのか、細かいところに行き渡らすのは難しい。目標は髪の毛の先まで流せるようになること。

そして魔力。これは色々調査してわかったのは気より扱いづらく、肉体強化も気ほど強化されない事。しかし魔法が使える。

せっかく違う世界にきたのだ、魔法は使ってみたい。だから魔力の操作も気と同時進行で進めていく。それに魔力は気と違って外部から吸収している。今は無意識に吸収しているみたいだが、もしこれを意図的に吸収する事ができたら？気は自分の中から湧き出てるもので、多分限界があるだろう。でも魔力を好きな時に好きなだけ供給できたら、いつでも魔法を使うことができる。気がなくなった時も代わりに使うことができる。

一長一短。どちらも良い所があって悪い所がある。でもお互いが短所を打ち消しあってる。うまくできてるものだ。

さて、考えが決まった所で早速実行だ。
当分の目標ができて上機嫌の俺は、ゆっくり気を全身に流していった。

六話（後書き）

独自設定、独自解釈が酷すぎる話。

そして魔法にワクワクする主人公。

でもゴメンな。お前魔法使えないんだよ。

主人公は基本的に気と魔力だけで戦っていく予定です。咸卦法が主力になります。

マジックアイテム自作出来るようにしてもいいかなあ〜って思ってますが、なんかややこしくなりそう。

七話

気と魔力の操作を鍛え始めて三ヶ月。生後十ヶ月になった。

髪の毛の先まで流せるようになるという目標はまだ達成できていないが、指先までなら行き渡らす事ができる。

そして魔力を意図的に吸収するというのは、まだできていない。無意識にやっている事を意識的にするのがこんなに大変だとは思わなかった。

要は俺がしようとしている事は、勝手に動いている心臓を自分の意思で動かそうとするのと一緒だ。……この例えだと全く出来そうにないな……。

まあ、まだできていないがコツはもう少しで掴めそうなのだ。このペースで鍛えていたらいつか出来るようになるだろう。

問題はこの魔力を意識的に吸収する訓練の時に気付いた事だ。

意識的に魔力を吸収しようとする際、掃除機みたいにスイッチを押せば吸い取れるという単純な仕組みにはなっていない。ちゃんと周りにある魔力を把握しなければ吸い取ることは出来ない。

今は大雑把にしか感じる事しか出来ないが、もっとちゃんと魔力を把握しなければ吸収するコツを掴んでも意味がない。

だからこれからは気と魔力の操作はお休みして、魔力を吸収するコツを見つける事、周りにある魔力を把握する事に集中して訓練していこうと思う。

魔法を使うのが楽しみだ。

さて、訓練内容も決まった事だし溜まりに溜まった疑問を解決しに行こう。

最近ネカネさんはネギにかまいっぱなしだ。まあ色々遊んであげたら反応が返ってくるネギの方が面白いのだろう。ネギもハイハイが出来るようになったから、ますます目が離せなくなったし。

ネカネさんも若いから二人の子供を同時に相手するのはキツイしな。それに俺はもう歩けるようになったからある程度ほっといても大丈夫だと判断したんだろう。

まあ、なんにしても自由な時間ができたのは嬉しい。少し寂しいが、ネギの世話に集中してくれるのは俺も望んでる事だ。いい子に育ててくれ。

時々転びそうになりながらやっと本棚に着いた。あまり本の量は多くないが、今の俺には充分。

まずはこの世界と前の世界との差異を調べる。そのためには歴史書でもあればいいのだが……。おっ『世界の歴史』ってのがある。なんと都合がいいが、これは幸先がいい。早速読んで見る事にしよう。

……結果を言うなら差異はなかった。この歴史書は俺に新たな発見をもたらさなかった。しかし新たな問題が出てきた。

文字がわかる。

歴史書を半分ぐらい読み終えた所でそれに気付いた。

今思ったら俺は生まれてすぐにお母さんの言葉を理解した。その時は前の俺はお母さんと一緒の言語を使うのだと思ったが、この歴史書を読んでそれが勘違いだとわかった。

俺が今住んでる場所はイギリスだ。だからイギリス英語で書かれた歴史書をなんも苦もなしに読めた事は驚かなかった。しかしこの歴史書は世界の歴史が書かれている。もちろんほとんどイギリス英語で書かれているのだが、要所所で別の言葉が書かれている所がある。俺はその別の言葉もスラスラ読めたのだ。

ハア……疑問を解決しようとしたのにまた疑問が増えるとは……。

歴史書をしまい何気なしに手に取った旧約聖書をパラパラめくる。もうやる気が一気になくなった。こうもポンボン疑問が湧いてきたらどう処理していいのかわからない。

前の俺は翻訳家だったのか？決別しようと思っても、こんな疑問が湧いてきたら気になってしまう。

旧約聖書を三分の一までめくった所で、手が止まる。

そのページにはこう書かれていた。

『バベルの塔』

調べ始めて最初の発見に身を強張らせる。

こんなもの俺は知らない。

慌てて姿勢を正し、本にかじりつく。

難しい言い回しで書かれていたが、なんとなく意味はわかった。

要約すると、人間がすごく高い塔を建てた。神が怒って塔を崩した。そしたら人間の言語がバラバラになった。

うん。要約しすぎた。

でも俺にとって重要なのは最後の、人間の言語がバラバラになったという部分だけだ。

もしかしたら、俺が前にいた世界ではバベルの塔は建設されなかった。だから人間の言語はバラバラにならなかった。

多分言語がバラバラになったのは神の罰なんだろう。俺はその罰を受けていない。だからこの世界ではどんな言語でもわかる。

んな馬鹿な……。ありえないだろ。こんな大きな違いがあったら同

じ歴史を辿るのは不可能だろうし、旧約聖書なんてフィクションだ。バベルの塔なんてこの世界でも建設されてない。

やっぱり前の俺は翻訳家だったのだろう。

それしか説明がつかない。

そろそろ戻らないとさすがにネカネさんが心配する。

今日は結構有意義な日だった。新しい疑問が増えたが、これはもう考えなくていい。

今日は本を読んでばっかだったから、明日は訓練に専念しよう。

七話（後書き）

やっぱり魔法にワクワクする主人公。
でもその幻想は三歳の時に壊れる。

そして主人公のどんな言語でもわかる能力が発覚。
はつきり言おう。後付け設定です。

三話か四話書いてる時に気付きました。主人公って日本人？って。
だから急いでそれっぽい理由を作って話に入れました。
矛盾が出てきそうで怖い。

やっと漫画買いました。まだ読んでないけど。
明後日までには読破します。

八話

スズナ・スプリングフィールドとして生まれて、一年が過ぎた。

誕生日パーティーは小規模だったが賑やかに行われた。

俺とネギが並んで座り、その周りをパーティーにきてくれたみんなが囲うように座る。

ネカネさん、ネカネさんの両親、一つ年上のアーニャ、アーニャのお母さん、そして俺達双子を実の孫のように可愛がってくれるスタンおじいさん。

本当のおじいさんがいるらしいのだが、都合が悪かったらしく今回は来ていない。

沢山のご馳走とケーキを食べて、パーティーは終わった。

みんなが寝静まった頃、俺はひっそり家を出た。

気をほとんど完璧に操作出来るようになったが、それで終わりではない。

気を使えるようになれば意味がない。

そのためにある程度身体を鍛える必要がある。ホントは武術もやり

たいんだが、生憎習うツテがない。記憶を探ってみても、武術に関する記憶はなかった。

さて、身体を鍛えるといっても何をすればいいかわからない。腕立て伏せ、腹筋、背筋をしようと思ったがまだ一歳なので無理は禁物。色々考えた結果、適当にパンチを打つことにした。変なクセが着いたら本格的に武術を始める際、困ることになりそうだが、何もやらないよりはマシだろう。

という訳で早速始める。

まずは足を肩幅より少し広めに開く。そして膝を曲げ、腰を落とし、背筋を伸ばす。右手を握り、拳を作って腰の位置に。左手は軽く握って顔の前に持っていく。深呼吸をして気持ち落ち着かせ、一気に右手を突き出す。この時左手の引きにも集中する。軽く握っていた左手を強く握り、しっかり握っていた右手をさらに締める。

パン

自分の右手から出た音に我に返る。

なんだこれ……………。

奇妙な現象に冷汗が滲む。

俺は今何を……………。

頭が自分のものでないかのように働かない。自分が何をやったのか
わからない。

…………いや違う、何が起こったのかわからない。

俺はパンチを打った。

左手を引き、右手を突き出した。そして…………右の拳は空気を叩き、
音を響かせた…………。

俺は武術初心者のはずだ。鍛えようと思った時、かなり記憶を探っ
たがパンチの打ち方なんて出てこなかった。

手続き記憶があったのか…………？いや、そんな筈はない。

手続き記憶は俗に言う『身体で覚える』記憶だ。でもこの身体は前の俺とは別の身体。そんなものがあるはずがない。

それにさっきの現象は、覚えていた感覚に沿って身体を動かしたとは到底思えない。

感覚なんていう曖昧なものでなく、もっとはっきりとしたもの……、知性によって理想的なパンチの打ち方、完全なパンチの打ち方をあらかじめ理解していたような……。

そこまで考えて、天啓が降りた。

アイデア……。そうだアイデアだ……！

定まらなかった思考が一つに纏まる。本日二度目の奇妙な現象。しかしそのことには一切疑問を抱かず、俺の意識は『天啓』で降りてきたアイデアという三文字に囚われた。

アイデアとは哲学用語だ。

ギリシャ語で『見る』という意味の『idein』に由来していて、もともとは『見られるもの』のこと、ものの『姿』や『形』を意味している。

そして哲学者のプラトンは、ideaという言葉で、形は形でも、我々の肉眼に見える形ではなく、『心の目』『魂の目』によって洞

察される『物事の真の姿』と言及している。
英語でも『ideal』という単語がある。この意味は『理想』だ。

中期の哲学は人の魂は不滅であって輪廻転生を繰り返しており、もともとは霊界にいてそこでアイデア——理想的で完全な原型を見ていて、この世界に堕ちる時にそれを忘れてしまったが、この世界で肉体を使い不完全な像を見ることがによりアイデアを思い出してるのだ、それが学習ということだ、という考え方である。

……多分俺はこの世界に堕ちる時に忘れる筈だった、前の記憶と武術のアイデアを覚えているのだろう。

武術のアイデアは覚えているのに自分の事は忘れてるのはどうかと思うが、まあこれで修行の目処が着いた。

身体を鍛える時は武術のアイデアに従って身体を動かす。この時氣を使って肉体強化するのを忘れない。

そして最近コツを掴めた魔力の吸収はもっと吸収速度を速くする。

周りにある魔力の把握は常に意識すること。

最近気付いたのだが魔力を把握することは空間を把握することに直結している。

もっと広い範囲を細かく把握することができたらどこに何があるのかわかるかもしれない。

もしわかったらこの深夜の修行ももっと安心してできる。一歳の子供が修行してるなんてちよっと不気味だからな。

さて修行はまだ始まったばかり。びっくりする事がわかったがマイナスに働く処か、プラスに働く事だ。あまり気にする必要はない。

深呼吸して気持ちを落ち着かせる。しかしまだ心はざわついたまま。それに構わず俺は左の拳を突き出した。

八話（後書き）

主人公の能力判明！

うん。意味わかんないね。俺も書いててわかんなくなった。

まあ平たく言うとなんて武術に関しての学習能力がとんでもないよって事。見取り稽古と似たようなもんです。

見取り稽古と違うのは別に見なくても使える事と、完璧に使うにはある程度努力が必要な事。

充分チートだあ

九話

一歳の誕生日から約半年。

ネギが歩けるようになった。

本当に子供の成長って早い。ちょうど一年前はまだハイハイも出来なかったのに今はしっかり自分の足で立って歩いている。

ヤベツ、目頭熱くなってきた。

「スズユナア〜」

「どうしたネギ？遊びたいのか？」

「うんっ」

「じゃあ何して遊ぶ？」

「絵本読んでえ」

「わかった。じゃあ今日はこれを読もうか。」

最近ネギはよく俺に甘えてくる。ネカネさんが学校に行ったので遊

び相手が俺しかないのだ。

アーニヤがいるが、そんなに頻繁に遊ぶ訳じゃない。

理由がどうであれこうやってネギが甘えてくるのは嬉しい。家にある本はもう全部読んでしまったので、昼間はする事がなくて暇なのだ。それにもう俺の家族はネギしかない。ネギが頼ってくる内は出来るだけ応えてあげたい。

引っ付いて眠るネギをなんとか起こさず剥がし、家を出る。

いつもの場所に着いたので早速始める。

まずは気と魔力を体中に行き渡らせる。右半身に気を、左半身に魔力を。

充分に行き渡ったのを確認して、構えをとる。

そして頭に浮かぶ完全で理想的なパンチに一致するように右手を突き出す。しかしゆっくりと。

一コマ一コマしっかり確認しながら確実に右手を突き出していく。

右腕が伸びきったら次は左腕。

そして蹴り。膝を支点に上段、中段、下段と高さを変えて、それぞれの型を体に覚え込ませていく。

こんな感じで最初は頭の中のアイデアをゆっくりでいいから確実に真似ていく。

体が温まってきたら段々速さを上げていく。

体を動かし始めて約三時間。

気がなくなってきたので一旦動きを止める。そして体に行き渡らせていた気と魔力を解除。

一気に疲労感が体を襲う。ジワリと滲み出る汗を拭おうにも腕を上げることも億劫だ。堪らずその場に座り込む。

「ハア……ハア……」

息が荒くなり心臓が別の生き物のように暴れ回る。体が落ち着くまで動けそうにない。

しかしただ座っているだけでは時間がもったいないので魔力の把握の修行を始める。今は半径五メートル内の魔力しか把握することができないが、これをもっと広める。

それと空間の把握も一緒に鍛える。

“ある”か“ない”かの判断は半径五メートル。“何がある”かの判断は半径二メートル内であればできる。

魔力の把握の修行をしながら消費した魔力を吸収することも忘れない。吸収速度は大分上がってきた。今の目標は消費しつつも吸収すること。これはまだ全然出来ていない。

——さらに半年後

二歳の誕生日を迎え、ネギが走れるようになり、俺は魔力を消費しながら吸収するというのを不完全だが出来るようになった。

誕生日パーティーには前のメンバー＋祖父が参加して賑やかに行われた。

そして俺達双子の寝場所が本宅から離れに移動。さらにネギが甘えるようになった。

「スズナ〜はやく〜」

「ハイハイ、今行くよ」

たどたどしかったネギの喋り方はすっかりできて、今ではちゃんと俺の名前を読んでもくれる。遊び方も活発になって最近ではよく外で遊ぶことが多くなった。

「あなたたちおそいわよっ！いつまでまたせるのよ！！」

外で遊ぶようになってアーニャとも遊ぶ機会が増えた。

「ゴメンゴメン。ちょっと準備に手間取っちゃって。で、今日は何して遊ぶ？」

「きょうはおままごとよっ」

「えっくボクおいかけっこがいい」

「なによっネギのくせに生意気よ！」

「むうくく」

なんとも微笑ましい喧嘩を始めた二人。

最初は子供と一緒に遊ぶのに抵抗感があつたが、二人の成長を間近で見られるのですっかり楽しんでる。

「二人共落ち着いて。どっちもすればいいだろ？時間はいっぱいあるんだから。」

「それもそうね。じゃあまずおままごとするわよ！スズナがあたしの旦那さんで…」

「そっそんなのダメだよっ！スズナはボクの兄弟なんだから！」

「なっそれだとおままごとにならないでしょっ！」

「それでもダメなの」

俺の腕を取り合って引っ張り合う二人。好かれるのは嬉しいが腕が引っこ抜けそうだ。

「離しなさいよネギ〜」

「う〜イヤだ〜」

「いい加減にしろっ」

収拾が着かなくなりそうだったので腕を引っ張り返し二人を引き寄せる。

話し合いの結果、アーニヤは俺のお姉ちゃん。ネギは俺のお嫁さんになった。どうしてこうなった。

ネギがちゃんと寝付いたのを確認して家を出る。

修行を始めて一年。俺も大分成長した。気と魔力の操作はほぼ完璧。魔力の吸収速度もかなり速くなった。

魔力の把握は半径十メートルまで広げることができ、空間の把握も“何がある”かの判断は半径四メートルまで出来る。このおかげでかくれんぼでは負けなしだ。

武術は言うまでもないだろう。完全で理想的な型がわかるので、ただそれに沿って体を動かせばいい。最近は落ちていた棒で剣術に挑戦中だ。

そろそろ新しいことを始めないとマンネリ化してしまう。

という訳で今日は実験だ。

右手に気を集め、左手に魔力を集める。そして両手をゆっくり近づける。

何か新しい事をと考えると真っ先に思い付いたのがこれだ。気と魔力。この二つはよく似ている。だから二つを使って何か出来ないかと考えて、まあ安直だが合わせてみる事にした。合成できて強化されればいいんだが……

「ううっ!!」

バチィッ

そんな都合よくいかないか……。

二つは触れた瞬間反発し合って気と魔力は虚空に消え、両手は痺れている

望んだ結果は得られなかったが、この反発力の強さは利用出来そう

だ。
さっきは様子見で少量の気と魔力で試したがもっと量を増やせば反発力も強くなるだろう。そうすれば反発する際に起こる衝撃も強くなる。

あんな少量で両手が痺れるのだ量を増やせばどうなるか期待出来そうだ。

実験はまあ成功かな。

とりあえずマンネリの危機は去った。

これからは今までの修行十気と魔力の反発する性質を利用した攻撃も一緒に鍛えていこう。

やる事が増えて上機嫌の俺は意気揚々と修行を開始した。

九話（後書き）

更新遅れました。すいません。

でもタグに不定期ってあるから問題ないよねっ！

……はい、ほんとに反省してます。

そろそろ悪魔襲撃事件なので色々考えてたら遅くなりました。
多分次の次ぐらいで悪魔襲撃です。どうなるんだろうね〜。

咸卦法習得と思いきや、まだ習得しない。

とりあえず悪魔襲撃事件が終わるまで習得しない予定です。

十話

さらに一年が過ぎた。

ネカネさんに続きアーニヤも学校に行き、村に子供が俺達双子だけになった。

そのせいか俺達は村のみんなに可愛がられている。

そして今日は学校が長い休みに入ったのでネカネさんとアーニヤが帰って来ている。そのせいでネギは朝から上機嫌だ。

ネカネさんが帰ってきたので今日は贅沢に外食にしようとなって、今三人で向かっているところだ。ネギを真ん中において、俺とネカネさんがネギの手を持っている。

「――そうね。あなた達のお父さんはねーとっても有名な英雄……。
スーパーマンみたいな人だったのよ。」

「スーパーマン？」

道中ネギがお父さんについて聞いた。

「そう、誰かがピンチになったらどこからともなく現れて、必ず助けてくれるのよ。」

「ヘースーパーマン。かつこいいー…。ネカネお姉ちゃんも助けられたことあるの？」

「フフフ、それはひ・み・つ・よ。」

初めて聞く話にネギは興味津々だ。俺の手を握りながらワタワタ腕を振っている。

「じゃが、奴は死んだ。散々無茶やった挙げ句、お前達を放ったらかしてな。……バカな奴じゃよ。」

「もうスタンさん！子供にそんな言い方」

「……『死んだ』って？」

「……………もう、会えないってことよ……」

『死んだ』——スタンさんが言った事実は少なからず俺に衝撃を与えた。

一緒に過ごした時間は短いがあの人俺の親だ。親孝行の一つぐらいはしたかった。

「……………もう会えないってどーゆーこと？お父さんどこか遠くへ引っ

越しちゃったの？」

「……そうね、遠い遠い国へ行ってしまったの。『死んだ』というのはそういうことよ」

「じゃあさ、じゃあさ、もし僕がピンチになったらお父さんは来てくれるの？」

「う、う……んそうね……」

答えづらい質問をされて言い淀むネカネさん。

俺もごまかそうと思って色々考えるが、いい答えが思い付かない。

「あなたバカねー。死んだ人には二度と会えないのよ。サウザンドマスターの子供なのにそんなこともわからないのかしら」

「アーニヤちゃんこんにちは」

「久しぶりアーニヤ」

「そ、そんなことないもん」

答えに窮しているとアーニヤがやってきた。さっきのスタンさんもそうだが、突然人の話に割り込むのが流行っているのか？

「お父さんは来てくれるもん！」

「あなたバカねっ！『死ぬ』のイミわかってないでしょ！」

ギャーギャーワーワー喧嘩を始める二人。この二人は会う度に喧嘩をしている。

「そ、それに僕にはスズナがいるもんっ！お父さんが来てくれなくてもスズナが来てくれるもん！」

握っていた俺の手を引っ張り、左腕に抱き着くネギ。左腕から信頼感がありありと伝わってくる。

「またスズナ！そういうの何て言うか知ってる？！ブラコンって言うのよ！いい加減そういうのから卒業しないとスズナが迷惑よ！」

「え……………迷惑……？」

アーニヤの言葉を真に受けて縋るような目を向けて来るネギ。

「迷惑なんかじゃないよ。ネギがピンチになったら真っ先に駆け付ける。」

俺の言葉に安心して笑顔になるネギ。頭を撫でてやると目を細めてさらに嬉しそうにする。

しかし対照的にアーニヤの機嫌は悪くなった。俺とネギをすごく睨

んでくる。フォローを入れないと数日は機嫌が悪いままだろう。

「大丈夫、アーニャがピンチになっても駆け付けるよ。」

「なっ別にそんなのいいわよ！あたしは自分でなんとかできるから！」

顔を赤くしながら反発するアーニャ。しかし頭を撫でている手を振り払わないので満更でもないのだろう。

「うゝゝゝ」

アーニャはしばらくの間唸りながら頭を撫でられていたが、羞恥が限界に達したのか、突然話を変えてきた。

「ハイコレ！あんたたちにあげる。」

「コレは？」

「初心者用の練習杖。あんたたちも来年から学校来るんでしょう。生きてた頃のお父さんみたくなりたかったら、ちょっとは練習しておきなさい」

ネギには先端に星が着いた棒を、俺には月が着いた棒を渡して踵を返すアーニャ。どうやらこれを渡すために俺達に会いにきたようだ。

「ありがとうアーニャ。大事にするよ」

「べっ別に大事にしなくてもいいからしっかり練習しなさい!!」

顔を赤くしながら走り去っていくアーニャ。なんだかアーニャはいつも元気だな。

さて、待ちに待った修行の時間だ。

今日は気と魔力の操作も、魔力の吸収も、空間把握も全部お休みして、魔法の修行をする。

すでに呪文は頭に叩き込んである。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。しかし魔法という未知を目の前にして高ぶった心は全然鎮まらない。

三回深呼吸をしても高ぶったままなので、鎮めることを諦めて次のステップに進む。

周りから魔力を集められるだけ集めて、胸の当たりに留める。そして杖を持っている右手に流していく。

肩、二の腕、肘、手首、掌、そして杖。
物に魔力を流すのは初めてだか上手くいった。後は呪文を唱えるだけ。

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカット）」

勢いよく振った杖の先からは何も出なかった。

まあ初っ端からできてしまっただけは面白くない。教科書にも反復練習が大事だと書いてあった。時間はまだまだある。できるまで何回でもやってやる。

——二時間後

「プラクテェー!! ビギー!! ナルウウ!!!! アールデスカットオオ
オオ!!!!!!」

呪文は叫喚となって、ヤケクソに腕を振るう。
しかし杖の先からは何も出ない。

「ハア……ハア……」

腕を振っていただけなのに、ひどく息が荒れる。

何故だ。何故何も起こらない。教科書に書いてあったことは全て意識している。

呪文をしっかりと唱える。魔力を杖に流す。出来上がる魔法をイメージする。

全部ちゃんと意識しながら杖を振っていた。なのに何も起こらない。
何がダメなんだ……。

もしかして………

いや……明日アーニヤに魔法を見せてもらおう。思い付いた事について考えるのはそれからでも遅くない。

今日は疲れた。もう体を動かす気分じゃない。明日に備えて早く寝よう。

「あんたたち遅い！！せっかく学校が休みで帰ってきてるんだからもっと早く来なさいよ！！」

まだ昼にもなっていない頃、俺達はいつもの三人で集まっていた。来て早々アーニヤに怒鳴られたが、今の俺には全然気にならない。

「ゴメンアーニヤ。次からはもっと早く来るよ」

「わかればいいのよっ。じゃあ今日は何して遊ぶ？あたしはおままごとがいいけど……」

「あっ遊ぶ前にお願いがあるんだ。魔法を見せて欲しい。」

「魔法？別にいいわよ。しっかり見ときなさい！」

魔法を見せてと頼んだら意気揚々と承諾したアーニヤ。魔法に関しては俺達の優位に立てるから嬉しいんだろう。

服の中から杖を取り出して深呼吸して構える。少し緊張してるみたいだ。その様子からアーニヤはまだ魔法が出来るようになって日が浅いのだろう。

アーニヤの緊張が伝わってネギが体を固くする。
俺はアーニヤの一挙一動を見逃すまいと集中する。
そしてアーニヤの口から呪文が紡がれた。

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカット）」

軽く振るわれた杖の先からポツと火が出る。

安心した面持ちで火を見ていたアーニヤ。しかしネギが拍手をする
と自信満々に胸を張る。

俺もネギに釣られて手を叩いていたが、頭は別の事を考えていた。

アーニヤの魔力操作は上手いとは言い難かった。

基準がわからないのでなんとも言えないのだが、少なくとも俺の方
が上手い。

なのに魔法が使えた。

アーニヤが使えて俺が使えない理由。それは俺が異世界人だからだ
ろう。

俺は魔力を違和感として認識した。俺にとって魔力は異物なのだ。
魔法がどのようなして発生するかはわからない。もし魔法という神
秘がこの世界の法則で発生するなら、異世界から転生してきた俺が
使える道理はない。

俺はこの世界にしかない法則に乗れないのだ。

昔から楽しみにしてた分魔法が使えないとわかって、やっぱりショックではある。でも今まで使えないのが普通だったのだ。あまり落ち込むべきではない。

期待するような目で見てくるアーニヤの頭に手を伸ばす。

目を細めて頭を撫でられるアーニヤに癒されて自然と口元が緩んだ。

十話（後書き）

また更新遅れました。

原作の内容に入って、会話が増えたので思うように書けない……
はい言い訳です。ごめんなさい。

次はやつと悪魔襲撃事件。

多分更新遅れます。

一週間以内に出来るように頑張ります。

主人公の口調が安定しない……

もっと荒っぽい口調にしたいのになんか丁寧になっちゃう。

成長するにつれて口調が変わるかもしれませんが、まあ気にしないで下さい。

そして魔法が使えない理由判明。自分でも書いてて意味わからなくなってきた……。

単純に魔法無効化能力にすればよかったんですが……あれって消す魔法を選択出来るみたいなので、その気になったら自分は魔法使えると思うんですね。

だから小難しい理由で魔法を使えなくしようと思ったんですよ。もしたらなんかよくわからん事に……

十一話

あれから数日が経った。

最初は気落ちしていたがネギやアーニヤと遊んでいたら、もうどうでもよくなった。

魔法が使えないとわかったので修行はいつものやつにシフトチェンジ。

魔力の吸収スピードはさらに上がり、魔力の把握は半径三十メートル、空間の把握は“何がある”かの判断は半径五メートルまで出来るようになった。

ある程度把握範囲が広がったので、もっと詳細がわかるように特訓中だ。

棒キレを使って剣術をやっていたが、やっぱりあまり手広くするのはダメだと思って、拳術一本に絞ることにした。

空手道、合気道、柔道、テコンドー、相撲、少林寺拳法、中国拳法、ボクシング、レスリング、あと名前がわからない物もいくつかやっている。……………充分手広くやっているが仕方ない。

武術をやるという意気込みで体を動かせば、色々な動作がいっぱい頭に浮かぶ。そこから適当に選択して体を動かし、体にその動作を覚え込ませる。できたら別の動作に移る。

そんなことを続けていたら節操が無くなってきた。

一つの武術に絞って修行したらいいいのだが、頭に浮かぶ数ある動作の中から特定のものを見つけたのはかなり面倒なのだ。だからとりあえず適当に目に着いたものをやることにした。

おかげでパンチだけで三十三通りのバリエーションがある。そろそろ自重しないと大変なことになりそうだ。

ネカネさんとアーニヤの休みが終わって、学校に戻った。次に会えるのは一ヶ月後になる。

アーニヤがいなくなったので、外が遊ぶ機会が無くなり、最近は屋内で遊ぶ事が増えた。特に、ネギはアーニヤの言い付け通り魔法の練習に精を出している。

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ（アールデスカット）
えいっ」

掛け声と共に振り下ろされた杖の先が軌跡をなぞる様に光った。

今のはイメージが足りなかったみたいだな。ネギは魔力量がとんでもなく多いから、少し力むだけでこの魔法に必要な魔力を込める事が出来る。呪文の詠唱も少したどとしかかったが、しっかり聞き取れた。

ネギは俺と違って魔法の才能があるみたいだ。将来が楽しみだ。

「いつ今なんか出たっ！なんか出たよねスズナ？！」

「ああ、杖の先がちょっと光ったな。ネギはすごいな。この分だと

すぐに魔法が使えるようになるぞ。」

「えへへ」

褒められて破顔するネギの頭を撫でる。サラサラの髪感触が癖になりそうだ。

「でもあんまりやり過ぎると疲れるから、魔法の練習はこれでおしまい。また明日な。」

「うん、わかった！」

ネギは元気よく返事をして俺の隣に座る。そしてスケッチブックに絵を描きはじめた。

「ピンチになったら現れる♪ どこからともなく現れる♪」

歌を歌いながら上機嫌にクレヨンを進めていく。出来上がった絵はまだ見た事がないであろうお父さんと、そして……

「いつも傍にいて助けてくれる♪」

随分デフォルメされた俺の姿。下手くそな絵だが俺にとっては万金よりも価値のあるもの。

ネギの頭を撫でながら決意する。どんなことからこの可愛い兄を守ろうと。

魔法の練習もそこそこに、ネギは最近一人で遊ぶ事が多くなった。俺が掃除やらなんやらで、ネギの相手ができないからだ。まあいつまでも付きつきりって訳には行かないからな。

今日も朝からネカネさんの両親の手伝いをやっている。二人はいいと言っているのだが、お世話になっているのに何もしないというのは心苦しい。

「スズナ君、もう手伝いはいいから遊んできなさい。」

「えっ？でもまだ終わってませんよ」

「いや、ここまでやってもらって十分助かってる。それよりネギの事を見てやってくれ。最近やんちゃばっかでみんな困ってるんだ」

「ネギが…？じゃあお言葉に甘えて遊んできます。ネギが今どこにいるのかわかりますか？」

「うーん、そうだな…さっき湖の方に行ったのを見たが…」

「そうですか。それじゃあ行ってきます」

ネギがやんちゃを……？

俺の前ではおとなしいのだが、やっぱり遊びたい盛りなのかな？

…………嫌な予感がする。少し急ごう。

さて、湖に着いたんだがネギの姿は見えない。もう違う所に行ったのか？それならどこに行ったんだ？うゝんネギが一人遊びする場所なんて全然思い付かない。とりあえず一旦村に戻ろう。

「ん？あれは……」

帰る前に湖を一望したら湖の真ん中辺りに何かあるのに気付いた。水鳥でもいるのか？こんな寒いのに水の中に入るなんて変な鳥もいるんだな。……いや、鳥にしては様子がおかしい。あんなに暴れるなんてまるで溺れてるみたいだ。それにあの赤い毛……

「っ！ネギ！！」

嫌な予感が的中した。

なんでネギが湖の中にいるのかわからないが、今はそんなこと考えてる暇はない。湖畔に向かって走りながら服を脱いでいく。そして気を全身に流して準備万端。今ほど修行をしてきてよかったと思っ

た事はない。

（今行くからな、ネギ。）

気合いを入れ、覚悟を決めて湖に飛び込んだ。

（……んっ、ここは…？）

落ちていた意識が浮上する。自分が今どういう状況なのか考えるが、頭の中に靄がかかっているみたいにはつきりしない。体を起こそうと思ったが力が入らなくて、モゾモゾと動くだけで終わった。

「あら、気がついた？」

声をした方に視線を向ける。頭ごと動かそうとしたがダルかったの

でやめた。

視線の先にはアーニャのお母さんが微笑んでいた。

「あんまり動いたらダメよ。40度も熱が出てるんだから。」

優しい声色で話しながら、おでこに冷たいおしぼりを置いてくれる。その冷たさで段々頭がはつきりしていくのがわかる。

俺はなんで寝てるんだ…？今日は朝から叔父さんの手伝いをして、そしてその後湖に向かって……………っ！！

上半身を勢いよく跳ね上げる。おでこにあったおしぼりが飛んでいき、頭痛と吐き気を催す。しかしそんなことに気を留めてる暇はない。

「あっ！動いたらダメって言ったでしょ！！大人しく横になってなさい！！」

俺の突然の行動にアーニャのお母さんが駆け寄ってくる。俺の肩に手をかけベッドに押し戻そうとする。少し抵抗したが、呆気なくベッドに押し倒された。

「ネギはっ……ネギは無事なんですかっ？」

俺の言葉を聞いてアーニャのお母さんは納得したように微笑んだ。

「ネギ君は大丈夫よ。あなたと同じように熱を出して寝込んでいるけど命に別状はないわ。あなたが頑張ったおかげね。」

諭すようにネギの安否を教えてくれる。同時に頭を撫でられ、俺の気持ちは一気にクールダウンしていく。

「そうですか。よかった……。」

頭を撫でられる感触が心地好くて、段々瞼が重くなっていく。もう少しで夢の中に入りそうだ。しかし…

ぺちんっ

小意気のいい音と、おでこの衝撃で目が覚めた。

「でもあんまり褒められた事じゃないわよ。ネギ君が心配だったのはわかるけど、次からはちゃんと大人を呼びなさい。」

「あ、えっ、すっすいません…。」

あまりにも面と向かって怒られたので少し言葉に詰まってしまった。

「あなたは何でも一人でやろうとするわ。そしてあなたは賢いから実際出来てしまう。でも人ひとりに出来る事なんて限られてるの。ましてやあなたは子供。今回は二人共無事だったけど、毎回うまくいく訳じゃないの。もっと周りを頼りなさい。」

真っ直ぐ俺の目を見て話すアーニャのお母さん。顔は怒った顔をし

ているが、目は心配そうに伏せられている。
今まで迷惑をかけないように一人で頑張ってきたが、裏目に出たようだ。結局迷惑をかけてしまうとは、これでは普通の子供より手を焼くだろう。

「わかりました。次からは気をつけます。」

「うんっ！わかればよろしい。」

頭を一撫でしておしほりを拾いに行くアーニヤのお母さん。そしてもう一度冷たくしておでこに置いてくれた。

「それにしてもよく人工呼吸のやり方なんて知ってたわね。なにか本でも読んだの？」

「いっいや、あの時はとにかく必死でっ……」

「へっ必死でねっ」

ニヤニヤ嫌らしい視線を向けるアーニヤのお母さん。
急に恥ずかしくなり、体中の熱が上がる。多分耳まで真っ赤だ。

「フフッおませさんっ♪」

羞恥に耐え切れず布団を頭まで被った。

湖の事件からさらに日が経った。

兄弟共に高熱でぶっ倒れていたが、もう完治した。完治してすぐにネギを叱りにいったが、もうスタンさんにこってり絞られた後で俺が言う事はなかった。それより、俺の顔を見た途端に泣き出したのであやすのが大変だった。

ネギが湖に入った理由はお父さんに逢いたかったから。ピンチになればお父さんが来てくれると思ったらしい。これは『死』についてちゃんと説明しなかった俺達の責任でもある。しかし幼いネギに理解しろというのは少し酷だ。だからネギにはもうこんな事はしないようにしっかりと言い聞かせた。

「お邪魔しまゝす」

「あらあらスズナ君。早いわね。」

さて、今日はネカネさんが帰ってくる日だ。今までそのために色々お手伝いしてたのだが、昨日で全部終わって、もうする事がなくなった。

だから今日はネカネさんに遅れて帰ってくるアーニヤを迎えるためにアーニヤの家のお手伝いに来た。おばさんには湖の事件の時に面倒を見てもらったので、その恩もある。

「ごめんなさいねスズナ君。手伝わせちゃって。」

「いえ、日頃からお世話になってるので、このぐらいは喜んで引き受けます。」

「フッフ本当に助かるわ。でもネギ君の事見てなくていいの？」

「大丈夫です。ネギはちゃんと約束を守ってくれるので。」

「そう、それなら安心ね」

ネギは今湖に釣りに行っている。最初は湖に行くのはやめるように言おうと思ったが、信じる事も兄弟の勤めだ。足を滑らせないように注意して見送った。

「それじゃあまず一階から掃除していきましようか。スズナ君は棚とかを拭いていってくれるかしら。」

「わかりました。」

掃除を始めて数時間。空気が変わった。なんかザワついてるというか、変に静かすぎるというか。よくわからないがあまり良い気分ではない。掃除を中断して様子を見ようとした時、

ドーン！！！！

世界を揺らすような爆発音が響いた。

「っ！！」

地面が揺れて体勢を崩す。片膝を付いてなんとか倒れないように踏ん張る。揺れが収まって再び立ち上がったところでおばさんがやってきた。

「スズナ君っ！大丈夫！？」

「はいっ、俺は大丈夫です。それより一体何がっ？」

俺の質問におばさんが答えようと口を開いた時、

ドーン!!!!!!!!!!

また爆発音。それにさっきより大きい。

ビックリして肩を竦めさせた俺をおばさんが手を引いて歩き出した。少し早足になっていて転びそうになる。

おばさんはクローゼットの前に着くと、そのドアを開けて俺と向かい合った。

「おばさんが様子を見てくるからスズナ君はこの中に入っていて。何があってもクローゼットから出てはダメよ。おばさんが戻ってくるまでの辛抱だから我慢してね。」

おばさんの言葉に異を唱えようとしたが、人差し指を添えられて口が塞がれる。

「大人はね子供の前ではカッコつけたいの。だから我が儘を言っちゃダメ。大丈夫すぐに戻ってくるから。」

そう言って微笑むおばさん。俺が何を言っても迷惑にしかならないだろう。

「わかり、ました……。」

搾り出すように言葉吐く。俺の返事を聞いておばさんはさらに笑みを深める。

「うん♪素直なのは良いことよ。お詫びに後でケーキを焼いて上げるから一緒に食べようね。」

俺の小指と自分の小指を絡ませた後、俺が入ったクローゼットのドアを閉めて、おばさんは走り去って行った。

おばさんの足音がやけに耳に残った。

クローゼットの中に入って何時間が経ったのだろう。外では相変わらず爆発音、そして崩壊音が響いている。

———怖い。

心中で呻いて、体を掻き抱く。奥歯がカチカチと音を鳴らしてうるさい。

いつまでここにいればいいんだろう。いつになったらおばさんは来るんだろう。

いつまで——。いつになったら——。

恐怖と不安で思考が囚われる。さっきからこの二つが頭の中をグルグル回って落ちている。

いつまで——。いつになったら——。

———いや、もう……………

思考が最下層に落ち着こうとした時、事態が動いた。

「スズナ君!!」

玄関を乱暴に開ける音と、おばさんの声が耳に飛び込んだ。

長時間動かずにいたせいで強張った体を弾くように動かす。クロ―ゼットのドアを押し開け、玄関の方に駆けていく。

「おばさんっ!!」

おばさんの声を聞いてホッと息を吐く。……しかし、その姿を見て息が詰まる。

赤。

おばさんの右上半身はどす黒い赤で覆われていた。

勢い付いていた足が止まる。視線はその部分に固定された。

「おばさん…、それ……。」

口が震えて上手く発音出来ない。いや、口だけじゃない。体中が自分の物でないかのように小刻みに震えだす。

（一体、外で何が……。）

「スズナ君っ！これは私のじゃないから安心して。それより早く逃げろわよっ！ここには危ないわ!!」

俺の姿を確認して、すぐに駆け寄ってくるおばさん。近づくにつれて、右上半身だけでなく全身が薄汚れていることに気が付く。

「おばさんっ！外で何が起こってるの？！」

駆け寄ってくるおばさんに声を荒げて質問する。敬語も取れて、その姿はまさに子供だ。

「悪魔がやってきたの。」

おばさんの声は俺の声に反して静かだった。

手を掴まれ、引っ張られる。またも歩幅が合わずに転びそうになるが、今は文句を言うわけにはいかない。

「下位悪魔が数えられないほど……。あと上位悪魔も数体いるわ。」

悪魔の事をまったく知らない俺でも事態の深刻さはわかった。

「悪魔達がなんでこの村にやってきたかはわからないわ。でも、もう村は壊滅状態。ここにもその内悪魔がやってくるわ。その前に早く逃げないとっ！」

お婆さんの声が段々と上擦っていく。それに合わせて歩くスピードも上がってきた。もう玄関まですぐそこだ。

「壊滅状態って……………」

俺の呟きに答えず、お婆さんは玄関のドアを乱暴に開けた。

「っ！！」

目の前に広がった光景に心臓が止まりそうになる。

燃えている。

家が……………村が……………全てが燃えている。

「行くわよ、スズナ君。」

お婆さんが発破の言葉をかけるが、耳の間を通り抜けるだけ。俺は放心状態になっていた。

一層強く手を引かれて歩き出す。放心状態になっていたせいで少しつつのめる。それに構わずお婆さんは進み続けた。

家を出てすぐに“それ”はやってきた。

おばさんが突然振り返って俺の体を押す。

お婆さんの行動に“何故？”の言葉が心に浮かぶが、前方からやってきた光がそれを掻き消した。

「うう……。 」

無様に転がって呻く。目が眩んだせいで今の状況がわからない。やっと視力が戻って、周りを見渡す。

大きな変化はない。ただ、目の前に石像があるだけで……。

「あ……」

その石像の顔は色々な感情が込められていた。

必死。懇願。不安。悲哀。

ありとあらゆる感情が石像から——お婆さんから伝わってくる。知らずと口から音が零れる。目はお婆さんに釘付けだが、焦点が合わない。体が再び震えだす。頭の中は真っ白で、心は空っぽになってしまった。

ジャリッ

地面を踏み締める音が俺の鼓膜を震わせる。

おばさんに固定されていた目を音源の方に向ける。

そこには正に“悪魔”といった出で立ちのバケモノがいた。

「ああ……。。」

また口から音が漏れる。体の震えは一層強くなり、頭の中を一つの感情が支配する。

キシッ

鳴き声か、はたまた笑い声なのか。俺の弦きを聞いて、バケモノは口を歪ませて声を出す。

「ああああ……。。」

おぼさんの石像と異形の存在を前にして、俺の心を満たしていたのは不安でも、悲哀でも、孤独でも、ましてや恐怖でもない。

「……ああああああ!!!!!!」

俺の心を支配していたのは憤怒だった。

激情に任せて体を動かす。弾くように飛び出した体は一瞬で悪魔の眼前に現れる。

右手を握り締め、腰溜めの位置に持っていく。気は既に全身に流している。

心に満ちていた憤怒を拳に乗せて、三十三通りあるパンチの打ち方から最適なものを選んで一気に突き出す。

突き出した拳は狙い通り悪魔の頬に突き刺さった。修行の成果が発揮出来たこと、おぼさんの仇を討てることを確認して自然と口元が緩む。

しかし……。

腹に衝撃を感じて、俺の体は無惨に吹っ飛んだ。

「があっ！」

地面を転がりながら今の衝撃について考える。しかしもう答えは出ている。なんてことはない。ただ殴り返されただけ。

今まで喧嘩すらした事がない俺。完璧なパンチの打ち方がわかって、闘い方なんて全然わからない。

倒れているところを近付いてきた悪魔に蹴られる。
そこからは一方的な暴力だった。

……もう何度蹴られたのかわからない。蹴られる度に発していたうめき声も、十を数えた頃に出なくなつた。

一応全身に氣を流して防御しているが、この体はまだ三歳。焼け石に水だ。

三歳……。そうだまだ三年しか経っていない。
スズナ・スプリングフィールドとして生まれてまだ三年しか経っていない……。

短い。短すぎる。二度目の人生だからってこれはあんまりだ。まだやりたい事はたくさんある。それなのにこんな終わり方ひど過ぎる。

目から涙が溢れ出す。霞んだ視界に悪魔が歩いて来るのが見えた。

フランスの思想家ルソーは著書の〈エミール〉でこう記している。

『我々はいわば二度この世に生まれる。一度目は存在するために、二度目は生きるために』

なら俺は……、俺はなんのために生まれた？三度目、四度目の生を迎えた俺はなんのためにこの世にいる？

目の前に立った悪魔が俺の胸元を掴んで持ち上げる。足が地から離れ、体が力なく揺れる。喉を圧迫されて苦しいが、呻く元氣もない。

圧倒的無意味。絶望的無価値。

こんな事なら生まれてこなければよかった。生まれた意味が無く、この世にいる価値もない。

俺は――――

悪魔と視点の高さが一緒になる。

悪魔が口を開け、その奥からおばさんを石像に変えた光が瞬くのが精細に見える。

死の間際がこんなに呆気ないものとは……。

光が徐々に強くなっていく。その強さに目を開けていられず、ゆっくりと閉じていく。

瞼の裏に暗闇が映る。………はずだった。

これは走馬灯なのか。今まで見てきた映像が高速で流れる。普通な

ら知覚出来ない速さ。でも一つ残らず頭に叩き込まれる。

——「スズナ、よく眠るんじゃないぞ。」

——「スズナはアリカ似だな。」

結局両親には何も返せなかった。墓参りぐらいはしたかった。

——「スズナは将来、私の旦那さんになるのよっ！」

アーニャ……、ゴメン。もっと素敵な人を見つけてくれ。

次から次へと場面が移り変わる。映像の向こうで、悪魔が発している光が強くなっていくのがわかる。もう……終わりは近い。

最後にみんなの顔が見れてよかった。さっきまで悲哀で濡れていた心は、今までにないくらい安らかだ。

安穩とした気持ちで、映像を塗り潰した光を受け入れた。

——「スズナ！」

最も聞き慣れた声が心を揺さぶる。

——「一緒に寝よっ」

映像がなくても、音だけではっきりと情景が浮かぶ。

——「怖いからトイレに着いてきて……」

穏やかだった心が嘘のように揺れ動く。腹の底から力が湧いてきて、心臓が早鐘を打つ。死屍同然だった体に活力が満ちていく。

——「いつも傍にいて助けてくれる♪」

閉じていた瞼を一気に開く。焼けるような光が目を襲うが、気に留めず魔力を集めていく。

右手に気を、左手に魔力をありったけ込めて、眼前の悪魔を睨みつける。

右手を強く握り締め、拳を作り前に突き出す。左手でその拳をさらに締めるように包み込む。

気と魔力の反発する性質を利用しよう考えて思い付いた技。危険過ぎるのもっと修行してから使おうと思っていたが、今がその時だ。触れ合った気と魔力はその性質を遺憾無く発揮し、お互いから離れようとする。しかし、右手に握り込めた気を無理矢理その場に留める。

気が離れていかず、反発力が増した魔力は悪魔に向かって放射状に突き進んでいった。

「ぶっ飛ばえーーーー！！！！！！！！！！」

あまりの衝撃に悪魔の手が外れ、俺の体が吹き飛ぶ。

宙を舞い、体にさらなるダメージを負いながらも、俺の顔には笑みが浮かんでいた。

「グウツ！」

程なくして地面に到達。ボロボロの体に衝撃が走り、思わず呻き声を漏らす。地面に擦り付けながらなんとか顔を上げると、悪魔が消えていくのが見えた。

「ハハッやった……。やってやったぞ……」

充足感が体に満ちる。しかし、それに浸ることはしない。

「あゝああ!!」

俯せに倒れていた体を反転させる。ただそれだけの行動で激痛が全身に走る。特に両手は、ちぎれそうなほど痛い。さっきの衝撃の反動をモロに受けた右腕は赤く腫れ上がり、歪に折れ曲がっている。

魔力を込めていた左手は、前衛芸術のように指が曲がっていた。

正に満身創痍。だが、それでもここで倒れているわけにはいかない。

人は、生きている内に自分の生まれた意味を知る事は稀だ。存在するため、生きるため、ならその後は？

そんな事誰にもわからない。

三度目、四度目の生を迎えた俺には尚更わからない。

でも、もしこの問いの答えを今出すとしたら、それは……………

「ネギ……」

守るためだ。

俺は守るために生まれて、この世に存在している。

痛む体を無理矢理起こして立ち上がる。骨が軋んで、体内で嫌な音を鳴らすのが気にしない。

俺の双子の兄は寂しがり屋で怖がりだ。今頃きつと一人で震えて泣いている。こんなボロボロの俺が行っても、不安を煽るだけかもしれない。

それでも俺は、ネギの所に行かなければならない。

先走った気持ち体が引きずるように進んでいく。ボロボロの体に反して心は満ち足りていた。生まれた意味を知った俺に怖いものなんてない。今だったら何だって出来る。まずは湖を見に行こう。

そこで俺の意識は途絶えた。

十一話（後書き）

遅えよ。そして長い。

一週間以内に更新すると言ってこの体たらく。そして前話の二倍以上のページ数。
なんか本当にすいません。

アンケートって訳じゃないんですが、皆さんの意見が聞きたい事が一つ。

他のアニメの技って使えるようにしてもいいですかね？
今ところそのつもりで書いてるんですが、あんまり反対意見が多いようだったらやめたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7295y/>

アイデアの波に乗って

2011年12月28日22時46分発行